資質・能力を育成する
小学校国語科「書くこと」教育の基本的デザイン

学 籍 番 号　219307
氏　　名　伊達　梓
主指導教員　土山　和久
副指導教員　井上　博文

１．問題設定

私たちが生きる現代社会は、急激な経済成長やグローバル化、多様化など様々に変化しており、それに伴い学校教育の在り方や学校における子どもたちの学びも変化しているといえる。近年では資質・能力の育成が求められるようになったが、十分に言及されていないのが現状である。また筆者は学部時代、中学校における実習で「書くこと」に困り感を抱く児童を目の当たりにし、小学校国語科の「書くこと」教育に関心を持った。そこで本研究は資質・能力を育成する小学校国語科「書くこと」教育の基本的デザインについて実践的に考究することを目的としている。

２．研究の枠組み

本研究では、小学校国語科の「書くこと」で取り扱われる文章ジャンルのうち「説明的な文章」を取り扱い、その中でも特に「情報提示型」の文章を研究対象とする。教科書教材を分析すると「情報提示型」は大きく〈説明系列〉と〈報告系列〉の2つに分けることができ、低学年から高学年へ学年が上がるにつれて学習活動の内容や児童が書く文章の難易度が、より高次の段階へと移行していくことが明らかになった。そこで「学びの言語」といわれる、国語科だけでなく様々な場面で思考のレールとなり得る教育言語とそれと関連のある基本的言語行為を資質・能力の育成が目指される時代の「書くこと」の実践における新たなアプローチとして取り入れることにした。そしてそれぞれの学年で重点的に取り組ませたい文章ジャンルを選定し、児童に身に付けさせたい資質・能力をコンピテンシーとして規定した。またコンピテンシーを構成する要素を観点として部分的に取り出し、それが指導の中心となるような実践を展開するとともに児童の作文を分析する際の視点としても用いている。

３．6年生におけるドキュメンタリーとしての「報告文」の実践

卒業を目前に控えた６年生児童を対象に、小学校生活を振り返り自分自身の体験をドキュメンタリーとしての「報告文」に書く実践を行った。「振り返る」ということが対象児童にとって意味のある行為であったからこそ、児童の積極的な参加を促すことができ基本的言語行為「報告する」の行為主体としての児童の姿を見ることができた。しかし、参考として扱った教

科書教材の指導が不十分であったため、出来事の説明部分と筆者の語りからなるドキュメンタリーの特長をおさえられていない「報告文」を書く児童が多く見られた。

４．2年生における「説明文」の実践

対象学年が他教科の学習の一環として野菜を育てていたことから、2 つの文章を比較して読む東京書籍「サツマイモのそだて方」を中心教材として、野菜の育て方について「三つの気をつけること」を説明する文章を書く実践を行った。「サツマイモのそだて方」で相手や目的によって説明の仕方や表現方法が異なることを学習した児童は、それをふまえて「説明文」を書いた。今回の実践は低学年児童にとって難易度の高いものであったため基本的言語行為「説明する」の発動を促す実践としては課題が残ったといえ、十分な成果を得ることができなかった。しかし、低学年児童の躓きがどこにあるか明らかにすることができた。

５．4年生における「解説文」の実践

身の回りにあるものは様々な背景や理由から合理的に形が定まっているということを題材として、ものの「形とはたらき」について「解説文」を書く実践を行った。基本的言語行為「解説する」の行為主体として児童の「解き明かしたい」という個人的な意識を働かせることができたのは成果としていえよう。児童の作文を分析すると、ものを複数の面から捉え情報を合理的に組み合わせることで形の必然性を解説することができていた児童は多く見られたが、基本的言語行為の発動を促すような交流場面を設定できなかったのは課題として挙げられる。

６．研究の成果

「書くこと」の資質・能力の育成を目指す授業においては、知識・技能の獲得や「書くこと」そのものが学習のめあてになるのではなく基本的言語行為の発動を促す「書くこと」の学びを展開することでこれまでとは異なる児童の姿を見ることができた。それぞれの実践で、書くことの喜びや面白さを実感する児童や今回の学習を国語科以外の場面にいかしたいと振り返る児童、書いた文章を児童同士で共有する中で書くことに自分なりの意味を見出だす児童の姿があった。以上を踏まえて、基本的言語行為からコンピテンシーを措定し「書くこと」の実践を行うことで、児童に身に付けさせたい資質・能力を明確化し、児童を意図的に基本的言語行為の中に巻き込むことができる。これこそ本研究の意義であるといえるのではないだろうか。それを実現させるためには6年間の系統的な学びの中で児童の実態に即した支援や手立てを教師が適切に講じていく必要があるだろう。

７．今後の課題と展望

この研究を踏まえて、実践の場から資質・能力の育成について迫ることが一つの有効な手段になるのではないかという実践者としての期待を持った。今後は一人の実践者として積極的に資質・能力を育成する「書くこと」教育について検討していきたい。